明治の俳諧連衆

――俳諧讃岐道場について――

夏見知章

一

明治二十年、江戸時代からの著名な俳諧宗匠だった老鼠堂永機が義仲寺において執行した芭蕉法会は、七日七夜に及ぶ盛儀であったと伝えられている。この辺りまでが旧派の宗匠俳諧の盛んだった時期で、はや二十年代の半ばになると、正岡子規の俳句革新運動の第一声「獺祭書屋俳話」が『日本』誌上に発表される。以後、子規らの所謂「日本派」が俳壇の中心を占めて活躍し、それまでの旧派の宗匠俳諧を圧倒していったのである。

子規が、「月並調を知らずして徒に月並調を恐るゝものはいつの間にか月並調に陥り居る者少からず、試みに蒼虬梅室の句を読め。」（『墨汁一滴』）と、月並調の典型にしている蒼虬門に、次のような俳人がいた。

茂椎、藤井氏、名正容、菊壺と号す、蒼虬門、讃岐人、笠着集の著あり、天保年中。

（平林・大西『新選俳諧年表』より）

この藤井茂椎が讃岐丸亀の人だった関係から、茂椎の更に弟子で南茂秀という俳人が丸亀にいた。業は着物の紋を書く職人だが、草屋庵茂秀と称する俳諧宗匠でもあった。明治二十九年、丸亀市寺町定福寺に、松尾芭蕉の句碑「露とくゝこころみに浮世すゝかはや」を、発起人となって建立している。

草屋庵茂秀らの俳諧連衆で巻いた歌仙連句は、『草屋庵文庫俳諧部』と題する筆写本にまとめられていて、その下巻が現在筆者の所蔵になっている。子規の俳句革新運動以後にあっての、旧派の俳諧連衆の実状を知り得る資料である。和紙袋綴じの本文用紙には、「俳諧讃岐道場」と印刷されているが、この俳諧讃岐道場というのは、茂秀の俳諧なかま尾畑子青の如僊庵に設けられていた俳席である。丸亀市西平山町四十四番地にあった。子青は賀雀庵梅岳門で、『讃岐富士』という俳書がある。

俳諧讃岐道場の宗匠格は、賀雀庵二世吉岡梅岳だった。慶応二年高松生れ、本名吉岡理三郎、賀雀庵梅晴に師事す。明治二十三年賀雀庵二世を継ぐ。丸亀で呉服商を営む傍ら、明治三十年に俳句結社「薫艸会」を起して主筆となり、次いでそれを「蓬萊吟社」と改めた。

梅晴・梅岳の賀雀庵には他地方から訪ねて来る俳諧連衆も数多く、賀雀庵入口には「関帳」を置いていた。これは、行脚人の力倆を試すもので、関帳の最初に書いてある立句に対して付句を詠ませ、その付合の出来ぐあいによって俳諧連衆として招き入れるかどうかを

判定したのである。賀雀庵の交遊俳人の記載六百八十五人、記載の住所別分類を示せば次のとおり。

〔四国地方〕　讃岐(180)、阿波(40)、伊豫(21)、土佐(9)計250人

〔中国地方〕　備前(20)、備中(20)、備後(14)、作州(10)、伯耆(10)、因州(7)、安芸(6)、出雲(6)、周防(4)、長門(3)計100人

〔近畿地方〕　大阪(32)、京都(23)、播州(18)、伊勢(12)、淡路(8)、丹後・波(7)、近江(6)、神戸(2)、兵庫(2)、但馬(1)計111人

〔中部地方〕　名古屋(20)、信州(13)、三河(10)、遠江(10)、駿河(8)、甲斐(8)、美濃(4)、豆州(1)計74人

〔関東地方〕東京(30)、埼玉(14)、下総(13)、武蔵(7)、上総(3)、安房(1)計68人

〔北陸地方〕　越後(24)、加賀(10)、越前(6)、越中(6)、若狭(6)計52人

〔九州地方〕　筑後(12)、豊後(12)、肥後(1)計25人

〔東北地方〕　秋田(5)計5人

讃岐はもとより阿波や伊豫の俳諧連衆をはじめとして、中国地方や近畿地方、それに関東や中部、北は東北、南は九州の俳諧連衆まで、交遊関係の広さに驚かされる。「関帳」の必要もさぞかしと納得できるのである。

如儁庵子青の俳諧讃岐道場は、役人退職後の子青の隠居所に開かれていたものなので、その俳諧連衆も賀雀庵ほど交遊範囲は広くなく、人数も多くはない。それでも俳諧讃岐道場に来訪の行脚人も、『草屋庵文庫俳諧部下』所載歌仙の連衆に名をとゞめている者だけでも、伯耆・信濃・丹後・相模・尾張・遠江・淡路・阿波等の各地からやって来ているのである。他に名古屋の松浦羽洲・富永杜発・栗本士郎や、それに三河の石芝や松島の十湖ら、当時高名の俳諧宗匠たちも、ここ俳諧讃岐道場に交遊の人々であった。これらのことによっても、俳諧讃岐道場は、旧派の俳諧の世界ではかなり広く知られた有力な存在だったことがわかる。

二

『草屋庵文庫俳諧部』は、草屋庵茂秀や如儁庵子青ら讃岐丸亀の俳諧連衆と、それに他地方から行脚して来た俳諧連衆が加わっての、主として明治末期に巻かれた歌仙連句を記載するものである。

筆録者は茂秀、その用紙に子青の主宰する「俳諧讃岐道場」の名が刷り込まれていることは前述したが、これは生活に余裕のあった子青が一座の亭主役を果していたことを示すものであろう。筆者所蔵の同書下巻以外の巻は、現在のところ所在不明。

『草屋庵文庫俳諧部下』に記載されている俳諧讃岐道場にかゝわる連衆の俳諧は、歌仙連句三十二巻、その仲間の顔ぶれは既述の賀雀庵梅岳や草屋庵茂秀や如儁庵子青が常連で、他に高須鹿峰と同湖月女夫妻・内山自囚・新名南水・泥谷其中・梶原煙石・それに姓不詳の蛙水・文外・居石らの讃岐人、伯耆由良宿凌霜園辻晩香、阿波板野郡川端村安芸菖宇・信濃更級郡稲里村野地長楽・丹後加佐郡中筋村字七日市福田藍叟・相模中郡大山町大滝清音舎簾外・淡路洲本船場町鋤月・尾張木曽野町里小牧光田夢仙・遠江国見付町凌々園野

末汀鴎らの行脚人、これらの人々が連衆となっている。

次にこの連衆の作品例までに、丹後からの行脚人福田藍叟を迎えて子青と茂秀が同座した三吟歌仙をあげてみる。

翁忌の巻

翁忌や筆執る空のひと時雨　藍叟
　椎の木立のなつかしき冬　子青
淋しさにしをりを聞とて釜掛て　茂秀
　印して置く本の読みくち　叟
月代になるやら碇り上る船　青
　列さわやかに渡る雁金　秀
彼岸会に明け放したる浮見堂　叟
　足利文庫見るも珍らし　叟
年若に捌き急なる振りの袖　青
　持せもち添ふ閨の嶋台　秀
余念なく汗たら〳〵と謡好き　叟
　扇のしめる程のさす月　青
新らしき橋の袂との賑はひに　秀
　鳥居限りに馬車は通さぬ　叟
箒目の弛へぬ御成の道すがら　青
　なだめ兼たる俄か気違ひ　秀
土器に盃までも飛ばす花　叟
　面白うそらに雲雀鳴たつ　青
よい声を自慢に馬士の唄ふ春　秀
　物に慰む君がはつ旅　青
手品師の技にはすごき綱渡り　秀
　翘さ欲しやと思ふ川止め　叟
臨時客布団枕も足らぬ勝　青
　師走なかばに嫁の約束　秀
待受た兵士も無事に満期にて　叟
　貧乏徳利もあれば間に合ふ　青
牛繋く處も今は町となり　秀
　見違ふやうな楠公の宮　叟
昼よりも殊に賑ふ月の市　青
　鐸を鳴らして新蕎麦を売る　秀
格別に風の障りも見えぬ秋　叟
　大工遣ひの多い世さかり　青
算ふれば一寸乙子が十五才　秀
　細字読むも眼鏡用ひぬ　叟
黒門に丹えし花の掟書　青
　掃除の届く庵の麗か　秀

折からの「翁忌」に行脚人の藍叟が、芭蕉ゆかりの「時雨」を詠んで発句とすれば、亭主役の子青も、やはり芭蕉の「椎の木」で応じてその発句に寄せかけ、挨拶の脇を返している。茂秀の「て止め」の第三も、型どおりではあるが脇から転じて四句目を呼ぶに破綻はない。この歌仙、特にすばらしい付合というのではないが、まず三ツ物を見てもわかるように、なかなか手馴れたものである。

初折裏や名残表の遊びどころも、例えば初折裏の花の定座では讃岐屋島の「土器（かわらけ）」投げの興なども思われて花やぐし、名

残表の「川止め」→「臨時客」・「布団枕も足らぬ」→「師走なかばに嫁」・「嫁の約束」→「兵士も無事に満期」の付合など、いささかべた付に過ぎるきらいはあるけれども、これはこれなりに結構おもしろく、話巧者ばかりといった感じである。一徹な書生論議で、このような人々がさゝやかに楽しんでいたのを「月並み」だと言って咎め立てたのは、子規らも罪なことをしたものだと思う。

『草屋庵文庫俳諧部下』には、未完のものを含めて全部で三十二巻の歌仙連句が収録されている。記載の順序に従って、各歌仙の発句と脇の付合のみを挙げておく。

〔陽炎巻〕

陽炎や鳶の落せし魚のうへ　茂秀
　柳も夏にちかき町すじ　晩香

〔冬牡丹巻〕

花びらに利す寂あり冬牡丹　茂秀
　垣根を鶏の蠢るはつ霜　子青

〔梅　巻〕

咲きをしむ梅や寒さの跡戻り　子青
　調子のとれぬ鶯の声　茂秀

〔冬月巻〕

桐の実の頻に鳴るや冬の月　菖宇
　起りながらにはぜる枝炭　茂秀

〔梶葉巻〕

梶の葉や恋てう文字は裏に書　子青
　雲の几帳につとはいる月　長楽

〔すゝきの巻〕

芒程寝乱れはなしをみなへし　長楽
　よくさび栗る鈴虫の声　茂秀

〔探梅巻〕

探り人のぼち〳〵来たり梅屋敷　子青
　眠る山とは見えぬさゝ啼　藍叟

〔翁忌巻〕

翁忌や筆執る窓のひと時雨　藍叟
　椎の木立のなつかしき冬　子青

〔雪　巻〕

折れそうな突張り竹や雪の窓　茂秀
　梢の明りに光るとりの眼　子青

〔水仙巻〕

水仙や年々殖る日の恵み　湖月女
　まだ雉の来る初冬の庭　茂秀

〔年市巻〕

年の市梅さし上げて通りけり　梅岳
　酔た機嫌に宝船買ふ　茂秀

〔柳　巻〕

出過ぎたる家にかぶさる柳かな　子青
　陽炎もゆる竿干の布　梅岳

〔桜　巻〕

騒しく人からしたる桜かな　南水
　蹄の跡にもゆる陽炎　鹿峰

〔梅見巻〕
誘れて袖の梅見の一座かな　自囚
春楽もしき友の交り　梅岳

〔苗代巻〕
苗代や家飛〳〵の片在處　湖月女
山根に響く雉子の一声　蛙水

〔雑煮巻〕
子宝に一座賑はふ雑煮かな　鹿峰
初日豊かにさし昇る軒　自囚

〔梅屋敷巻〕
四阿(あつまや)も橋も風雅や梅屋敷　蛙水
茶の味嘗めて愛でる淡雪　自囚

〔行春巻〕
風そより〳〵春行く梢かな　自囚
雉子のほろゝに啼ける深山路　子青

〔卯月巻〕
去し春をしみのゝかぬ卯月哉　茂秀
若葉にもある深き楽しみ　其中

〔新茶巻〕　汽車旅行
土瓶こみ売り込駅の新茶哉　其中
軽物に似ぬ場とるうちは荷　茂秀

〔螢　巻〕
田の家の夕暮れ楽し飛ぶ螢　子青
椎の若葉にかける三日月　簾外

〔明易巻〕
明易き窓に曳けり朝の雲　簾外
垣根に白く咲ける卯の花　子青

〔時鳥巻〕
ほとゝぎす声には闇もなかりけり　子青
明くれば窓へ落るわくら葉　鋤月

〔天川巻〕
一飛にする星もあり天の川　茂秀
鴈の翅さに風を切る音　夢仙

〔待宵巻〕
待宵や露の莚ろ敷通し　夢仙
冬蚊はら〳〵裾に飛付く　子青

〔柳　巻〕
船の酔撫させ醒す柳かな　茂秀
橋の上からながむ雪解け　居石

〔夜永巻〕
道語る友と忘るゝ夜長哉　自囚
見れば端山に入りかゝる月　茂秀

〔花野巻〕
笠敷て良くはへる花野かな　茂秀
入りかゝる日に残る新月　自囚

〔福寿草巻〕　郵便吟
日の影の飜(コボ)れてぬくし福寿草　汀鷗
あら玉のとし試る筆　茂秀

〔松乃花巻〕

古柿やなにこれから松の花を友　自囚

巣のつくらひに引帰る鶴　茂秀

〔七種巻〕

七草も首尾よく花の盛り哉　茂秀

鶴の千代吟ふ庵のあたゝか　自囚

〔牡丹巻〕　三十六吟の首尾行

艶のある咲きぶりや白牡丹　梅岳

蚊にこまるとは人知らぬ庵　自囚

梅や桜や牡丹や水仙、花の巻名が圧倒的に多いことに気づく。それに月と雪が加わって「月雪花」の風流、これこそ「月並み」陳腐だと貶めることはたやすいが、そのような共通の素材を通して風雅の同心に結ばれるのが俳諧連衆のあり方ではなかったろうか。

次に、この俳諧讃岐道場の連衆が、それではどのような素材を句に詠みこんでいるか、そのことを調べてみる。

三

『草屋庵文庫俳諧部下』所載歌仙連句三十二巻一一二八句（最後の「牡丹巻」が三十六吟の首尾行なので十二句）に詠まれた素材の特徴を見るために、ほぼ同時期の『ホトトギス』明治四十四年一月号・七月号・十一月号・四十五年四月号の「東京俳句会」「地方俳句会」の一一六五句の素材と比較したのが次の調査である。

〈明治の俳諧と俳句の素材比較表〉

俳諧の素材（『草屋庵文庫俳諧部下』連句）	俳句の素材（『ホトトギス』明治44・1～45・4俳句）
1、自然 月(97)、風(17)、空(17)、雪(16)、露(15)、霜(7)、雲(7)、日(陽)(7)、霞(6)、日和(6)、陽炎(6)、雨(5)、氷(5)、時雨(3)、野分(3)、夕立(2)、霧(2)、嵐(2)、蓮(2)、初汐(2)、雷(以下1)、水煙、凧、夕凪、小春凪、はや汐、天の川、星、梅雨、虹、曙、初日、	1、自然 月(47)、雨(38)、風(37)、雪(27)、霧(20)、露(18)、霜(11)、時雨(10)、霞(8)、夕立(8)、陽炎(8)、天の川(5)、野分(5)、初雷(5)、靄(3)、星(2)、霰(2)、雷(2)、
2、地理 山(23)、道(14)、橋(9)、京都(8)、里(5)、谷(4)、野(4)、町(3)、藪(3)、川(3)、往来(3)、温泉(3)、嵯峨野(3)、湖(2)、村(2)、田舎(2)、宇治(2)、高野山(2)、伊勢(2)、富士筑波(2)、三井寺(2)、知恩院(2)、箱根山	2、地理 山(10)、温泉(14)、藪(8)、海(7)、枯野(6)、池(5)、川(4)、都(3)、漁村(3)、湖(3)、火山(2)、浜館(2)、墓地(2)、濃(2)、富士（以下1）、小野の篠原、生野、品川、比叡、住吉、土佐、長崎、江戸、木曽、吉野、嵯峨、徳島、三河、

(2)、滝の白糸(2)、越後(以下1)、諏訪、種が島、飛鳥山、三輪、枚方、すみだ堤、天の橋立、出雲、有馬、赤穂、別府、上野、千日前、神泉苑、新潟、大津、琴平、池田町、逢坂、古戦場、軍事要塞、養老瀑、布引瀑、

3、植物

花(55)、松(10)、梅(9)、竹(6)、桜(4)、柳(3)、牡丹(2)、桃(2)、夕顔(2)、女郎花(2)、木槿(2)、椎(2)、椿(以下1)、水仙、彼岸花、卯の花、福寿草、木瓜、葛、桔梗、露草、榎、梶葉、芒、七草、よもぎ、草、

4、動物

鶯(8)、犬(8)、虫(8)、蝶(8)、雁(7)、鳥(7)、時鳥(5)、馬(5)、猫(5)、牛(4)、鹿(4)、鳩(4)、鶴(3)、雉(3)、雲雀(3)、狐(3)、蚊(3)、鶏(2)、烏(2)、かもめ(2)、螢(2)、蟬(2)、蚕(2)、燕(以下1)、水鶏、木兎、鴨、きりぎりす、松虫、鈴虫、蛾、蚕、蛔、白蟻、蓑虫、

隅田、潮来、大津、宇治、六波羅、飛騨、保津川、京、御所、夢殿、三十三間堂、妙心寺、沼津公園、朝日山、那智、

3、植物

草(31)、花(26)、梅(15)、萩(15)、菊(14)、松(13)、桜(9)、柳(9)、桃(8)、竹(8)、海棠(6)、笹(6)、菜の花(6)、木槿(5)、芭蕉(5)、葛(5)、藤(4)、水仙(4)、芒(4)、女郎花(4)、鶏頭(4)、朝顔(3)、菜の花(3)、牡丹(3)、杉(3)、桐(2)、桑(2)、蕗(2)、つつじ(2)、花そば(2)、シャボテン(以下1)、銀杏、漫珠沙華、山吹、紫陽花、百合、椿、桔梗、

4、動物

蜻(27)、雁(24)、馬(23)、鳥(20)、虫(20)、蛙(15)、田螺(9)、猫(8)、燕(7)、鶏(7)、雀(7)、蝶(7)、河鹿(7)、鳴(6)、鮎(6)、鶯(5)、牛(5)、猿(5)、鼠(5)、蟬(5)、蟻蜂(5)、雲雀(4)、雉子(3)、熊(3)、金魚(3)、蚕(3)、蟹(3)、蚊(3)、虹(3)、鶴(2)、鷺(2)、千鳥(2)、水鳥(2)、蔦(2)、梟(2)、蝙蝠(2)、狐(2)、犬(2)、蜂(2)、狸(以下1)、いたち、鹿、猪、虎、

5、宗教

寺(36)、僧(12)、神(8)、仏(4)、墓参(4)、塔(4)、宮(3)、絵馬(3)、供養(2)、鳥居(2)、法会(以下1)、彼岸会、辻堂、経堂、籠り堂、袈裟、線香、沙弥、身延詣、法話、巫女、坊主、山法師、行者、尼、涅槃像、仏煙、如来、石仏、禅、寒念仏、地蔵、仏果、札所、邪神、

5、宗教

神(7)、寺(5)、住持(和尚)(4)、開帳(3)、流行神(3)、宗旨(2)、念仏(2)、珠数(2)、禅学(2)、尼寺(2)、彼岸会(2)、鳥居(2)、仏(2)、魚藍観音(以下1)、地蔵、弁天、仁王、さすり仏、七福、蛭子大福、生神、絵行仏、飯縄名神、羽黒行者、陰陽師、破戒僧、大師、禅僧、老僧、菩提寺、壇那寺、御本山、古社、野社、石小祠、宮、大法会、御百度、命日、伊

勢講、十夜詣、寺寄進、御利益、雲板、如意、御仏事、佛壇、經本、御陵、野辺送り、

6、歴史

武士(5)、楠公(2)、応挙(2)、佐保姫(2)、始皇帝(以下1)、玄宗、平氏一門、元禄、登城、御天守、町奉行、氷室使、元信、奉幣使、京極、

7、行事

祭(9)、雛祭(3)、田植(2)、縁起視(2)、新組市(2)、八幡祭(2)、神楽(2)、記念視い(以下1)、長生視い、除幕式、開通式、年始、戴入、年市、無礼講、婚礼、彼岸、太秦祭、

8、人

子(16)、友(6)、嫁(5)、按摩(4)、医者(4)、鬼(4)、後家(2)、婆(2)、殿(2)、親族(2)、娘(2)、女郎(2)、兵士(2)、小僧(2)、大工(以下1)手品師、門付、掏摸、関取、新造、居候、丁稚、かくし妻、

6、歴史

敦盛、太閤、兼好、大名、家臣、六波羅武士、更衣、利久、

7、行事

神楽祭、初午、雛祭、宮祭、お告神楽、斧祭、風祭、歌供養、馬市、草市、筆供養、

8、人

子(12)、妻(7)、客(5)、柚(3)、大原女(2)、鍛冶(2)、師(2)、友(2)、百姓(以下1)大臣、海女、針子、里人、狂女、落人、乳人、婆、爺、番人、番頭、鯨売、竿竹売、祇師、案内者、商人、年寄、皇族、酒売り、巣売り、金貸、大官、豆腐屋、柚、下女、

9、旅

旅(19)、船(18)、駕(8)、車(8)、草鞋(4)、宿(3)、飛脚(2)、旅土産(2)、関守(2)、掛茶屋(2)、駅(2)、関所詰(以下1)、渡し守、川止め、下馬札、

10、生活

恋(17)、窓(16)、家(9)、金(9)、手(9)、店(8)、普請(8)、笠(8)、袖(7)、鐘(7)、筆(7)、名(6)、徳(6)、掃除(5)、団扇(5)、袂(5)、噂(5)、約束(5)、足(5)、邸(4)、煙草(4)、机(4)、紐(4)、籠(4)、砧(4)、杖(4)、凧(3)、蚊遣火(3)、紙布(3)、蒲団(3)、相場(3)、算盤(3)、簪(3)、炭(3)、袴(3)、汗(3)、笑顔(3)、知恵(3)、振り袖(3)、案内(3)、

9、旅

船(36)、茶屋(16)、駕(8)、橋(7)、帆(5)、駅(5)、旅(5)、宿(3)、草鞋(2)、船宿(以下1)、船遊女、船小屋、船紀行、街道、馬車、駅鈴、土産、道普請、

10、生活

雛(21)、炉(18)、砧(14)、扇(13)、灯籠(8)、藁(7)、庵(7)、傘(6)、機(6)、笠(5)、凧(5)、灸(5)、風呂(5)、石碑(5)、金(4)、行燈(4)、井戸(4)、鐘(3)、籠(3)、花火(3)、蚊帳(3)、烏帽子(3)、夜着(3)、炬燵(3)、鳴子(3)、庫裡(3)、行水(2)、案山子(2)、掃除(2)、櫛(2)、薪(2)、火事(2)、畳(2)、村会(以下1)、村議、化粧、冬籠、幽居、炊事、看板、手鞠、まま

洗濯(2)、下駄(2)、かまど(2)、棟上(2)、流行病(2)、疾病(2)、羽織(2)、鉢巻(2)、恪気(2)、釜(2)、夢(2)、手柄(2)、家柄(2)、白彩畳(2)、

11、食物

酒(21)、米(10)、餅(9)、茶(8)、瓢(5)、味噌(3)、名物(3)、弁当(3)、豆(2)、柿(2)、茸(2)、蕎麦(2)、豆腐汁(2)、盃(2)、鰯(2)、飯(2)、納豆(以下1)、大根、若和布、刺身、松茸汁、慈姑、芋、栗、胡椒、山葵、生節、塩、雑煮、青ぬた、蓮根、稲、徳利、膳、飯台、献立、料理場、鮭、鯉、

12、文化

文(13)、歌(9)、相撲(5)、唄(5)、将棋(象戦の道)(3)、碁(3)、文字(3)、風雅(3)、無線電信(3)、電話(3)、汽車(2)、遠目鏡(2)、貯金(2)、絵葉書(2)、狂言(2)、色紙(2)、野立てごと、笛、木馬、鍬、内職、布団、頭痛、医事、火鉢、暖炉、針、襟巻、外套、太刀、

11、食物

酒(12)、魚(11)、茶(10)、芋(9)、麦(8)、米(7)、烏瓜(7)、焼米(7)、瓜(6)、鶉(5)、柿(5)、栗(5)、餅(5)、大根(4)、芹(4)、葱(3)、干鱈(3)、乾鮭(2)、昼餉(2)、乳(2)、南瓜(2)、雑魚(2)、瓢(2)、鯊(2)、鰯(2)、蒐蒻(以下1)、西瓜、菓子、筍、山葵、蜜柑、茸、秋刀魚、若布、白魚汁、蜆汁、田螺汁、弁当、

12、文化

詩(9)、芝居(3)、講義(2)、園芸(2)、鞦韆(2)、読書(以下1)、猿楽、田楽、彫刻、処女作、著作、琵琶、典籍、俳興、吟行、歌聖、童謡、子守唄、馬子唄、花つみ日記、梅日記、俳(2)、謡(2)、郵便(以上1)、眼鏡、銅像、鉄砲、撰挙、賄賂、油絵、洋紙、小包、西洋人、外国、隠し芸、三味、詩、倶楽部、釣り、琴、撰集、俳句、千句の会、七部集、細道、村文庫、反射炉、ガラス戸、汽船、温室、夜学、製糸場、貯金、椅子、

全体を通して一番多く詠まれている素材は、俳諧も俳句も「月」である。歌仙連句が三十二巻あれば、当然ながら一巻に「定座の月」が三句詠まれることになるから歌仙の巻数の三倍の数だけ「月」が俳諧に出てきているのは納得できるが、俳句にあってもそのような理由はないにもかかわらず、これも素材の第一位が同じく「月」であるというのはどういうことであろうか。俳句革新以後にあっても、俳諧的な美意識が俳人の間に残っていて、その点は旧派も新派も大差なく、まず素材としては「月」「花」を賞でることが多かったのであろう。

植物の素材の中で頻出度の一位は、俳諧が「花」に対し俳句は「草」である。何という植物とも明示されない単なる「草」が、俳句には31句も出てくるが、俳諧の方では僅かに1句しか出てこない。写実派は無名の野の草をも素材として詠み込めるが、俳諧の座では名なしの草というのでは連衆のイメージが喚起できない。ただ花（桜）に次ぐ植物素材が松竹梅というのは、いかにも旧派らしいところである。

動物素材では、俳句の一位の「蜩」が特に目立っている。これに

「蟬」を加えれば32句である。俳諧では「蟬」の2句しか詠まれていない。俳諧にあっては、夏や冬よりも春秋の季が連句作法上たいせつにされるからである。「鶯」や「雁」の頻出度が高いのもそのせいである。

宗教・歴史・行事・人等の素材では、俳諧の方が圧倒的に豊かであり佳句も多い。風景や自然よりも、世情の生活や人生の機微が俳諧連衆にはより魅力あるものだったのだろう。信仰でも民衆の間の「流行神」や「さすり仏」など、咄しの場における格好の素材が多く取り上げられている。地理でも、山川の固有名詞や名所旧跡の具体的な地名が俳諧には多く、俳句ではそれが比較的に少なくなる。そして旅の素材でも、俳句の方では「船」という漠然とした憧憬の対象が一位にあって、事実の旅が意外に少ない。

文明開化の世相を反映して、俳諧連衆も「無線電信」「電話」「遠眼鏡」「汽車」「郵便」「選挙」など生活と密着した新素材をどんどん取り入れて、「賄賂」というような語まで出てくる。又、日清・日露の戦役後なので、「兵士」「軍話」「工兵隊」「露営」「満期」など軍隊や戦争に関係する素材も目につく。ところが、そういう素材も俳句には余り詠まれていない。

このように、明治末期の俳諧と俳句の素材を比較してみて気づくことは、なるほど俳諧の素材には連句の法則からくる事情は越えられないけれども、連句の座の「咄しの場」的雰囲気の中で、かなり積極的に新しいものを素材的には求めていたことがわかり、それは新派の俳句の素材以上であったということができるのである。

四

明治中葉における正岡子規の俳句革新運動以後にあっても、旧派の俳諧連衆の間ではまだ相当に連句が巻かれていた。俳諧と俳句の根本的な相違点は、「座の文学」か「個の文学」かというところにある。

現在にくらべてはるかに交通の不便だった明治時代に、北は東北から南は九州までの各地連衆との広範囲な交遊を持っていた「俳諧讃岐道場」の俳連衆のことは、単にこの連衆のこととのみして見るにとどめなければならない理由もあるまい。中央・地方を問わずにこのような俳諧連衆の存在していたことは、その交遊が相互のものであったことからも認められる。狭い地域や狭い自分の殻の中に閉じこもらないことは、人間の生き方として必要なことであり、そのように時間的にも空間的にも自らを解き放つことは文学本来の目的でもある。俳諧連衆は、連衆でもってそれを果そうとしたのであり、必ずしもそのやり方を低俗と決めつけるのは当るまい。

『草屋庵文庫俳諧部下』所載歌仙の素材を調べてみると、この俳諧連衆は古い殻にのみ閉じこもっていたのではなく、新しい素材や用語をもどんどん取り入れて、その連句の座を活気あるものにしていた様子がよくうかがえるのである。新派の俳句以上に積極的な対応を、新時代に向けて果そうと努めていた証拠であろう。しかし、彼ら俳諧連衆は年輩の者が多くて物知りであり過ぎた。花でも鳥でも地理でも、博識の故にかえって素材の対象に深く入れなかったのではないだろうか。若い「日本派」の俳人たちは、その点「草」と

か「鳥」とか、名は知らなくてもそれの写生の中で対象を凝視することが出来た。名所旧跡に旅しなくても、「船」の浪漫性に胸をおどらせた。だがそれは繰り返していうけれども「個の文学」の属性であり、近代詩の方向であって、俳諧という伝統文芸の展開の上の必然性ではない。俳諧は連句の「付合」を通して連衆が連帯しあう同心の場であり、俳諧と俳句とでは、求めるものが違っていたのである。それを一方的な俳句の立場からのみ見て、連句を徹底的に貶しめたのは日本派の「日本」等のマスコミを背景にした驕慢であったというべきではなかろうか。

以上は、明治末期の「俳諧叢岐道場」の俳諧連衆の『草屋庵文庫俳諧部下』所載の歌仙連句を通して、その連衆や素材について調べたものであるが、それは正岡子規の俳句革新運動以後にもなお各地で開かれていた俳諧の座の実状を見るためであった。今日では殆ど無名に等しいこれら多くの俳諧連衆について、今後更に調査を進めて行き、明治の文学史の偏頗を正す必要があるのではないかと考える次第である。

〈注〉　本稿については、香川県出身の武庫川女子大学国文学科卒業生泉保加代さんの調べに負うところが多い。記して感謝申し上げる。

（武庫川女子大学教授）